

航空襲撃戦 (Airborne Raid)

空軍大佐 Joshua Shani

(イスラエル空軍)

訳・3等空佐 織田邦男

(8空団)

本論文は、米空軍大学 (Air University) の指揮幕僚課程 (ACSC: Air Command and Staff College) で使用された教材「International Officer Warfare Study 1984」の Unconventional Warfare (不正規戦) の項に掲載されたものである。

目次

はじめに	4	情報
1 航空襲撃作戦	5	作戦準備
2 政治的解決	6	作戦の実施とC ³
3 作戦計画立案	7	結論及び提言

はじめに (訳者記)

1986年4月15日、米国はリビアに対しベトナム戦以来最大規模といわれる航空攻撃を実施した。これはリビアが関与している対米国テロに対し、警鐘を与えることを名目としたものであるが、極めて報復の意味合いが濃い。またその直後の東京サミットにおいても、レーガン大統領は英国を除き、リビアを名指しすることに難色を示した各国首脳を説得し、リビアの国名入りの反国際テロ声明を出すことに成功し、国際テロに対する米国の強い意志を示している。

ランドコーポレーションの調査によれば、1968年以降、米国の外交官、施設、その他の国益にかかわる事象に対するテロは1,294件の

ぼり、対ソ連の 106 件に比し、特に際立っている。これは全世界で発生した国際テロの 32%にあたり、この数字を見るに、全世界に権益を有し世界各地で活躍する米国人の生命、財産を保護する責任を有する米国政府がかくまでヒステリックに対国際テロに執着するのも、うなずけるような気がする。

3 年前、私は米空軍大学に留学を命ぜられたが、この時のカリキュラムでも対国際テロに対し多くの時間がさかれ、米空軍として米国の強い意志をいかなる形で具現できるか、また国際テロに対する航空戦力の果たすべき役割は何か等を真剣に摸索中であった米空軍の姿に強い印象を受けたことを記憶している。

この時の国際テロ対処は、1986 年 4 月のリビア攻撃のような大規模航空作戦ではなく、イラン大使館人質救出作戦や、イスラエルが実施したエンテベ空港人質救出作戦に見られるような、小規模で隠密裏、非公然に実施される特殊作戦（**Special Operation**）が主であったが、同じ航空戦力の運用でも、我々航空自衛隊の任務にはなじみの薄い作戦だけに興味をそそるものがあった。

ここに示す論文はエンテベ作戦の際、作戦の中核となった 4 機の C-130 の編隊長として参加したイスラエル空軍の **Joshua Shani** 大佐によって書かれたものである。（彼が米空軍戦略課程留学中に書いた論文）私は留学中に彼の講演を直接聴く機会を得、また本論文に接することができ、我々航空自衛官にとっては未知の分野だからというだけでなく、実戦的体質という面から深く感銘を受けた。

米空軍は基本教義にも示すように特殊作戦を空軍の 9 大任務の一つに位置付けてはいるものの、他作戦に比してそのコンセプトはいまだ確立されたものとは言い難く、作戦の基本原則、形態、またそれに必要な装備等に至ってはこれからという段階である。この米空軍が空軍大学の教育資料として彼の論文を引用し、彼を講師として招へいし、

教えを乞うところに米空軍あげての模索ぶりがうかがえ、またそこに米空軍の偉大さがあると考ええる。

我が航空自衛隊には現在このような任務は与えられていないが、ますます国際化していく社会の中で、将来こういう任務が与えられるということが全くないとも言い切れない。また航空自衛隊の精強化という観点からも本論文は我々に多くの示唆を与えていると考え、この紙面を借りて紹介する次第である。

1 航空襲撃作戦 (Airborne Raids)

“私はまず、共通の認識というものが、物事を達成する上で不可欠である、と確信している。また、最良の方策を求め、常に改善を追求するという事については決して妥協してはならないし、妥協の余地はないと考える。私は、課せられた任務はいかなるものであっても達成できる能力があると絶対的な自信をもって言えるし、イスラエルにおいては母国の将来のために戦うすべての者はその能力を有していると深く信じている。”

上記は、1976年7月3日、パレスタインテロリストによって拉致された人質を救出するため、エンテベ空港ビルに突入した特殊部隊指揮官 Jonathan Netaniahu 中佐の言葉である。この言葉に表現された精神は、“航空襲撃”を成功させるのに必要不可欠なものである。“**Military Review**” でいう“襲撃 (Raid) の定義は以下のとおりである。

“敵を混乱させ、情報を獲得し、敵の施設を破壊するため敵の領域に、速やかに突入する通常小規模の作戦行動であり、課せられた任務達成後の徹退によって終了する”

この内容に対し、私は人質や戦争捕虜を救出するために”という言葉をつけ加えたい。多くのテロリストに対する襲撃というものは、小規模のテロリストグループに対して実施されているが、ときおり、国

家が支援するテロリズムに対しても実施される。国際テロというものは支援国なくしてはあり得ない。ソ連が最大の支援国であり、キューバ、リビア、南イエメン等も支援国としての役割を果たしている。

この世界的な問題を解決するための外交努力は、継続的に実施されているし、どんな国際テロ事件が発生しても、まずは外交手段により解決しようとする。しかしながら国家の対応というものはすぐに知れわたり、テロリストに対し、秘密裏に対応することはまず不可能といえる。1963年コンゴ動乱の際、ワシントンに対する助言として

McGeorge Burdy にあてられた手紙に表現される態度を、私個人としては妥当なものと考えている。

“危険にさらされている人々を救出するために、行動を起こせば、結果がどっちに転んでも非難されるだろう。どうせ非難されるなら堂々と自信をもって敢然と、もし要するならば挑戦的に、これを実施した方が良い”

金銭的か政治的かはともかくとして、何かを得るために無実の人間を人質として拘束している犯人たちは、それ相応の報復を受けてもやむを得まい。空に生きる人間として、私は六つの“航空襲撃”の事例をとらえて分析、比較、批判及び評価を実施した。この六つの事例はよく知られているが、まずひとつとおり簡単に振り返ってみたい。

まず最初は、1963年の“**Dragon Rouge** 作戦である。これは、コンゴの **Stanlyville** で、**Simb** の反逆者によって捕えられた人質グループを解放した作戦であり、米軍の **C-130** とベルギーのパラシュート部隊が参加した。パラシュート部隊は **C-130** でベルギーから南大西洋の中心に位置する **Ascension** 島に運ばれた。この際スペイン及び **Stanlyville** から 550 マイル離れた **Kamima** に給油のために立ち寄っている。そこから **Stanlyville** 近くの降下ゾーンまでは、コンゴ空軍による **C-26** のエスコートを受けている。パラシュート部隊降下後、ベル

ギー軍は飛行場を占領してジープや補給物品を卸下し、その後パラシュート部隊は町に突入し人質を解放した。その結果、兵士 3 人が死亡、7 人が負傷し人質 2,000 人は救出され、26 人が死亡した。

次の例は、1970 年 11 月 21 日にベトナムで実施された Son Tay 捕虜収容所襲撃作戦である。これは数か月の準備の後、精鋭部隊が HH-53、HH-3 ヘリを使用し、タイからハノイ近傍の Son Tay 捕虜収容所へ飛び、捕虜を奪回しようとした作戦である。空中給油ののち海軍の大規模な陽動作戦とともに、部隊は収容所内の着陸に成功したが、捕虜は既に移動した後であり、もぬけの殻であった。この際、着陸地点を少し間違っただけで 200 人の敵兵士と遭遇したが、全作戦を通じ 1 人が負傷し、着陸の際に一人が骨折しただけであった。

第 3 の例は、Mayaguez 事件である。1975 年 5 月 12 日、カンボジアは米国貨物船 Mayaguez 号を公海上で拿捕し、乗務員を連行し、船は本土から 35 マイル離れた Tang 島に保留された。これに対し米国政府は空軍を使い軍艦 3 隻を沈める等、乗務員を解放するよう激しく威嚇した。同時に海軍は 2 隻の巡洋艦と空母を出動させるとともに、1,100 名の海兵隊をタイに進出させた。4 日後、カンボジア軍が乗務員を船に戻そうとしているとき、カンボジア領土と島の目標に対し空軍と海軍による空からの強烈な攻撃を実施する一方、海兵隊が Mayaguez 号を確保した。この作戦により 18 名の死亡者、50 名の負傷者がでたが 39 名の乗務員は全員無事帰還できた。

これとは対照的な事例として、エンテベ襲撃作戦がある。1976 年 7 月 3 日、イスラエル空軍の C-130, 4 機がエンテベに飛び、空港のターミナルに拘束されていた 105 人の人質を救出した。1 番機の C-130 が着陸後、2～3 分で人質は救出され、テロリストは全員死亡した。残りの 3 機は数分後、1 番機に引き続いて着陸し、現場を確保し人質の撤収を支援した。エンテベへの飛行は、イスラエルからノンストップ

プであったが、帰路はナイロビとケニヤに着陸した。結果は人質3名が死亡、5名が負傷、将校1名が死亡、4名の兵士が負傷（軽傷3名、重傷1名）した。

5番目の事例は、1977年に発生した西独におけるハイジャック事件である。10月17日、西独政府はハイジャックされたルフトハンザ機をGSG-9と外交官を乗せた2機のボーイング707機で追跡した。ルフトハンザ機がソマリアのMagadishu着陸した2～3時間後GSG-9、28名の一団がハイジャック機に強行突入を実施した。結果は3名のテロリストが死亡、1名が負傷し、西独側は1名のGSG-9隊員、1名のスチュワーデス及び4名の乗組員が軽傷を負った。

最後の例は、1980年4月24日に実施されたイランにおける米大使館員救出作戦である。作戦の前半は空中給油機のC-130、1個フライトがエジプトの基地から8機のRH-53と会合するため、イラン領内の“Desert One”と名付けたポイントに飛行することであった。当初Desert Oneでヘリコプターに給油する予定であったが、天候不良と能力上の問題から5機のヘリコプターはDesert One”を離れミッションは中止された。撤退中、C-130とRH-53が地上で衝突炎上し、8名の隊員が死亡した。この事故により、ヘリコプターは放棄され、残りのC-130、4機ですべての隊員を撤収することが決心された。

これらの襲撃作戦に関する情報源の大部分がマスコミに公表されたものであり、私はこれらに関する詳しい秘密文書を読んだわけではない。しかしながら、これらの作戦に直接タッチした自分の経験から、私は報道された文章の行間を読むことに努め、これらの作戦における計画、指揮統制、作戦準備、政治的側面、実行方法等に焦点を合わせて考察し、ある結論と提言を得ることができたと考える。

私は本論文でこれらの考えを論じたいと考えるが、個々の作戦を年代順に述べることはしない。なぜなら私の考えに合致する典型的な作

戦や、強調するに値する作戦もあれば例外的な無視すべき作戦もあるからである。テロから人質を救出するための航空作戦というものをとりあげる必要性は、読者によって十分理解してもらえると確信している。またこの重要性は極めて高いと考える。最近の人質救出作戦に見られるようなテロリストの活動は益々増加しており、人質及び救出隊員の犠牲を最小にして救出を成功させるには、そのような状況に際して政府がとり得る選択肢を適切なものにし、かつこれを十分に理解させることが不可欠といえる。また戦訓を反映させた対応措置というものは段々困難になっていく。なぜならテロリスト側も手がこんでくるため、前回成功した作戦も次には同じ手が打てなくなるからである。

それではまず、襲撃作戦の最初のステップに焦点を合わせて見よう。典型的な人質事件においては、テロリストは通常の場合国籍を有しており、政府は常に外交面から解決を図ろうとする。

2 政治的解決

軍事的に解決を試みる前には、通常の場合、政治的な動きがある。それは状況を分析して軍事的解決策を立てるためのただの時間稼ぎであったりすることもある。しかしながら、大抵の場合は軍事力に訴えないで解決を見いだそうとする努力である。過去の例は不幸にも、これらの政治的試みはあまり有効でなかったことを証明している。

この種の事件においては時間を稼ぐことは極めて重要な要素であり、多くのケースで時間的要素が明暗を分けてきたといえる。Mayaguez 事件では、大統領はキッシンジャー国務長官に対し、中国から外交援助を引き出し、カンボジアにクルーと船を解放させるよう指示している。しかしながら、同時に大統領はこう発言している。

「私はそれに望みを持っているが、同時に外交手段が不成功に終わった時のために武力行使の計画を立案しなければならないとも考えて

いる。先の会議で私は既に国務省に対し海軍を出発させるとともに航空偵察を実施し、クルーが乗船しているかどうかを確認するよう命じた」

これと平行して、カンボジア政府に対しても米国政府の意志を明確に示すため、ホワイトハウスの **Ron Nessen** 報道官を通じて次のような声明を発表している。

「我々は米国貨物船がカンボジア海軍によって公海上で拿捕されたことを知った。大統領はそれを海賊行為であると認識し、現在国務省を通じてカンボジア政府に対し、船の即時返還を要求している。カンボジア政府が即時返還に応じない場合、極めて重大な事態を招く結果となろう」

この事件はカンボジア政府に対する外交努力及び軍事行使の準備、並びに直接的な恫喝の三者が同時平行的にうまく実施された例といえる。

エンテベの例はこれとはやや異なる。エンテベ作戦においても、多くの外交努力、つまり主にフランス政府を通じての交渉やイスラエル政府代表による **Idi Amin** に対する直接の電話交渉等が行なわれていた。軍事的選択については全くの極秘裏に行われ、また **Idi Amin** に対する恫喝も実施しなかった。1977年のルフトハンザ航空ハイジャック事件の場合、軍事的選択は外交努力の失敗に備えて計画された。

西独政府スポークスマン **Klaus Bolling** は、テロリストからの要求を受けとった後、「この最後通告ともいえるものを非常に真剣にとらえている」と発表した。同時に彼らは迅速に行動をとった。西独政府はテロリストと交渉するため調停者として国務大臣 **Hans Jurgen Wischnewshi** を送った。また、彼に同行して31人の **GSG-9** の隊員を、更にもう1機のボーイング707機で **GSG-9** 特殊部隊をキプロスに派遣し、ハイジャックされたルフトハンザ機を待ち伏せした。この

行動は外交努力と言えるだろうか？多分言えないだろう。この時は、時間を稼ぐために、テロリストと交渉する以外にも、多くの相手と交渉しているし、またシュミット政府は、以前発生した **Schleyer** 事件（西独財界人の **Schleyer** が誘拐され、最後に殺された）で怒り心頭に発していたため、当初から迅速に軍事行動の準備を整えていたのであった。

イランにおける大使館人質事件の場合、長期にわたって政治的解決努力が続けられた。11月9日には、カーター大統領自ら米国民に対し、イランにおける事件に対する怒り、フラストレーションを押さえ、人質救出のための静かな外交努力を支持するよう呼びかけている。ちょうどこの時、軍事力行使の計画もワシントンで立案されているところであった。政治、経済制裁等の圧力をも含めた外交努力が続けられる一方、軍事力行使の準備も進められていたのである。しかしながら、この時点においては、大統領はじめ米国政府は、軍事力を行使しなくても、この危機を打開できると考えていたようである。

コンゴにおける人質救出作戦（**Operation Dragon Rouge**）においては、ベルギー、米国、コンゴ、ケニヤ等の政治的解決の試みはすべて失敗に帰し、人質は **Stanleyville** に拘束されたままの状態であった。当時の問題点は、米国が国際世論に対し極めて臆病だったことである。

特殊軍事作戦は、ほとんどの場合、関係諸国に対しても通知せずに実施されるし、往々にして関係諸国の意図に反して実施される。作戦によっては安保理事会や国連総会で非難されることもある。しかし、果たしてここまで考慮すべきことであろうか。

私の個人的意見としては国際テロに対しては、軍事力で迅速に、しかも徹底的に戦うべきであると考えます。政治的解決の試みは至短時間に実施し、政府としては決して相手の恫喝に屈してはならない。時間稼ぎの外交努力も非常に大切ではあるが、人質を救う国家の責任というものは偽善的かつ目先きの利益で左右される国連決議や世論よりも

はるかに重いと考える。従って空軍の一人のパイロットである私の見解としては、特殊部隊による救出作戦計画は、危機的状況が持ち上がった時から直ちに立案を開始すべきであり、外交努力というものでは人質を救出し得ない場合が多いということを認識しておくことが必要だということである。

たとえ軍事力行使の計画が結果的に実行に移されなくても、それはそれで二次的な多くの成果を得ることができる。部隊が作戦実施のために実際に招集を受け、部隊の即応性が演練できるし、また交渉中の各国に対し政府の強い意志を表すことができるのである。

3 作戦計画立案

ここで私がとりあげる事例については、すべて軍事力行使に関する作戦計画立案は危機が発生した時点に開始されている。これらの事例について、軍事力行使に関する計画立案段階について考察してみたい。

Mayaguez 事件に関しては時間というものが極めてクリティカルな要素であった。つまり最大の問題点はカンボジア軍が乗組員を本土に連行してしまった場合、救出作戦が非常に困難になることである。政府当局が適切な決定を下すには、二つ以上の計画を立案することが必要であった。時の統合参謀本部議長 **David C Jones** 大将によると、実際に五つのプランを用意したといわれる。フォード大統領が選択したプラン、つまり指定目標に対する爆撃及び海兵隊による奇襲は第4の選択肢であった。

私の個人的見解としては五つの案というのは少しオプションが多すぎると考える。軍内部の検討段階で2～3の案まで絞り、大統領にはこの中から選んでもらうべきである。

この時、実際に実行に移された計画は最大規模の軍事力行使のオプションであった。巡洋艦2隻、空母1隻、海兵隊の12機のヘリコプ

ター、そして数多くの戦闘機、爆撃機及び偵察機が使用された。フォード大頭領は、所要に満たない兵力を逐次投入することによる失敗を強く恐れていた。この決断は、大部隊を準備するのに機を失しないならば適切であるといえよう。ただし、計画実行段階において、このような大部隊を、指揮、統制、調整することは、本ケースのように過剰行動を避けねばならぬ、という条件があるが故に非常に難しくなる。

これに反し、西独の例は、計画立案の時間的余裕が全くなく、作戦計画の立案は事実上、作戦遂行と平行して実施されたのである。こういう事例は、特殊部隊が一年中を通して、四六時中即応態勢にある場合にのみ可能である。私は **Mayaguez** 事件においても、このような特殊部隊が米本国から来援しておれば結果は更に好転していたと考える。

人質救出作戦のような場合、計画立案に着手した最初の数時間、あるいは数日は、通常の場合、時間をいたずらに浪費しているだけの時が多い。エンテベ作戦の場合、最初にできた計画は、リハーサルまで実施された後、種々の理由からキャンセルになった。従って最終的な計画を立案し、リハーサルをする余裕は2日間しかなく、綿密な計画を立案することができなかった。このため作戦遂行に当たっては、多くの不明点は、指揮所と現地指揮官の判断にまかされていたのである。

コンゴにおける救出作戦においても、時間的制約により、概略の計画立案さえも困難な状況にあった。特にこの作戦計画には、米軍のパイロット、ベルギーの落下傘部隊が含まれており、かつフランス、スペイン相手に調整をしなければならないことが更にこれを困難にした。**Asension** 島への移動は、米国、ベルギーの長距離共同移動訓練ということで偽騙していた。本作戦計画は 12 機の **C-130** でコンゴ沿岸に近い **Asension** 島へ落下傘部隊を降下させ、拘束されている数百人の人質を救出しようとするものであった。**Stanleyville** 空港近くに、落下傘部隊を降下させて空港を確保した後、**C-130** を着陸させようとする計

画は、余りにも時間的無駄があり複雑な計画であった。人質を巻き込んだ作戦においては、時間が作戦成功の鍵となる。このため、ジープを乗せた C-130 を着陸させる代わりに、ジープをパラシュート部隊とともに降下させて襲撃部隊の先発隊を先ず市内に向かわせ、他の部隊は地上で再編成して増援することとなった。

イランの人質救出作戦においては、十分すぎるといって良い程、時間的余裕があった。Holloway 報告は次のように述べている。

「計画は、バックアップのヘリコプターの数と天候急変に対する備えを除き完璧であった。もっと大きなヘリコプター部隊と、悪天候下における備えがあれば作戦成功の確率は増加していたであろう」

私はこれに同意できない。8機のヘリコプターのうち、2機に不測事態が発生するかも知れないという計画立案段階の見積りは良いとしても、計画立案者としては整備性の比較的良好な海兵隊のヘリコプターを使用するというのが合理的な考えであろう。“Desert one”に関する限り、計画それ自体については問題はないと私は考える。しかしながら、一つの特殊作戦に陸、海、空、海兵隊の4軍を参加させたことは(参加させるよう命令されていたのかも知れないが…)、作戦準備や、指揮統制を複雑にただけであった。4軍に参加の機会を与えることは、こういう作戦には必須条件ではない。また、パイロットに対して事前に計画を明らかにせず、前進基地(多分エジプト領内であろう)に到着して初めて明らかにしたのも誤りだと考える。パイロットの一人は米空軍大学在学中の論文で次のように言っている。

「我々は、全員が真の作戦計画を見たがっていた。そして、いったん見た後は皆が非常に驚いた。高度の秘密保全の必要性はあるものの、パイロットに対し、事前に計画の細部に習熟させていなかったのは大きな誤りと言える」

Son Tay 作戦の計画立案時においても十分な時間的余裕はあり、計

画立案担当者は計画をできる限り完全にすべく努力している。このため作戦計画は、ただ一つ、情報の誤りを除いて完璧であったと言える。本作戦は海軍による大規模偽騙作戦と言える。海軍はこの時まで2年間、北ベトナム攻撃を中止しており、本作戦においても爆弾の代わりにフレアを投下している。

この作戦に関して、私は偽騙の作為は不必要だったと考える。海軍はこの時点において、作戦可能航空機を多数保有していたため、小規模で実行することにプライドが許さなかったのだろう。しかしながら、偽騙作為の行動によって、むしろ北ベトナムを警戒させることにもなりかねなかった。また、作戦全般を通じ、参加人員が多すぎるといえるし、他にも多くの疑問があげられる。計画担当者の **Blackburn** は、本計画立案に参画した際、次のことを懸念していた。

「北ベトナム側が、もし事前に計画を察知した場合、如何にして作戦を中止するか」

また次のことも後日判明した。ヘリコプターの搭載重量制限にもかかわらず多くの装備品を積載しすぎていた。この時の装備品は、参加人員 56 人に対し 110 の武器、11 本の斧、12 本のワイヤカッター、150 缶の水、100 箱の非常用食糧であった。十分に時間的余裕がある場合、そこまで周到に準備ができるかも知れない。しかし、そのような準備に時間を費やしている間に、機を失するかも知れないし、他のやっかいな問題が生起する可能性もある。これは **Son Tay** 爆撃作戦にだけいえることではない。本作戦ではむしろ真の問題点は情報の問題であり、これについては次項で詳しく述べることにする。

4 情報

イスラエルは、いまだ周辺のアラブ諸国と敵対関係にあるため、これらの国々に関する情報は常続的に収集している。だがアフリカのウ

ガンダに関する情報は全く無かったとあっていい。状況に関する基礎的な情報が無い場合、誰が計画を立案できるだろうか。イスラエル軍参謀長、**Mordechai** 中將は次のように述べている。

「…第2のポイントは情報データが十分にそろっていなかったことだ。このような作戦にとっては、できる限り詳しい情報を得ていることが極めて重要である」

情報不足という非常にクリティカルなハンデを背負っていたため、情報活動が直ちに開始された。エンテベ空港に関する情報は、公表されている資料から、滑走路、誘導路、管制塔、ターミナルビル、障害物、その他必要な情報を入手することができ問題は無かった。ウガンダ軍に関する情報は、エンテベ空港を通過した乗客から落穂を拾い集めるように少しずつ集められた。テロリストや彼らの武器、位置等については、イスラエル人以外の人々が解放された際、これらの人々から入手することができた。そのうちに完璧な写真を入手した。

これに反し、西独の **Mogadishu** 救出作戦においては、情報は作戦に対しなんら影響を与えなかったとあってよい。西独の考えは、ハイジャックされた航空機がソマリヤの **Mogadishu** に着陸するまで、民間機を使ってこれを追尾しようとするだけであった。この作戦は、事態の変化に応じて行動し、逐次適切に対応したという点で状況適応主義的作戦の典型といえる。

これとは対照的に **Mayaguez** 事件では、初頭から情報が非常に重要な役割を果たしている。**Jim Lorkin** は2～3分後、彼の部隊とともに離陸した。現地時間の午後10時30分までに、**Jim Mayaguez** に関する報告を送ってきている。あたりは暗すぎたため、目視発見は困難であったが、レーダーによって拿捕された貨物船をとらえることができた。その後、上空からの偵察活動は絶え間なく実施され、偵察機は指揮官に極めて良好な写真を提供している。これらの写真には、乗組員

の位置まで写し出されていた。

Dragon Rouge 作戦（コンゴにおける救出作戦）においては、**Stanleyville** に関する情報は無きに等しく、対空火砲や反乱軍に関する情報が全く得られないまま作戦計画が立案され、救出すべき人質の位置までも不明なままであった。

エンテベのケースでは航空偵察は実施できなかった。なぜなら目標上空を飛行することは、人質の殺戮を誘発する危険性があったからである。入手し得たのは空港周辺の写真を数枚得ただけではあったが作戦自体はうまくいった。

Son Tay 襲撃作戦においては、情報の無さが致命的であった。進攻経路や敵の脅威に関しては、かなりの時間をかけ綿密に検討されたが、捕虜が **Son Tay** に居るのか、あるいは既に他に移されているのかという肝心の疑問は残されたままであった。1970年7月から8月初旬にかけて捕虜たちが移動させられたことを知っていた情報将校はいなかった。ただ8月ごろから捕虜収容所の活動が低下したことだけを知っていたのである。

天候が許せば高高度偵察は実施できたが、作戦実施時期が迫ってからの低高度航空偵察は保全上実施できなかった。作戦開始数日前、悪天候により **SR-71** の高高度航空偵察は不調に終わった。結果論であるが、**Son Tay** は数か月前から既に殻であった。最新鋭の装備を保有し、高度に訓練された人員を有する米国の情報機関が、このような単純な事実を知り得なかったことは信じ難い。この種の作戦にあるのは輝かしい成功か、悲しい結末しかないことを銘記すべきである。

テヘラン救出作戦における決心は、必然的に非常にデリケートで複雑な問題を生起し、イラン内での情報活動を一層困難なものにした。特に当初の動きは最悪であった。大使館占拠事件以来、**CIA** はイラン領内に一人の情報源も持たず、人質の居場所に関する情報を得る望みは

全くなかったといわれる。これが事実かどうかは定かではないが、そう違わないだろう。このような複雑な作戦を準備するには、多大な労力を要し、かつ多くの優秀な人員を必要とするものである。内部事情について詳細を知る立場にないので多くは言えないが、この作戦について、どうしても納得できない疑問が2～3ある。

“Desert One” 作戦地として、なぜそんなに主要幹線道路に近いところを選んだのか？ 航空機の着陸場として、広大な砂漠のほかに適地は無かったのか？ 必要な事前準備さえすれば、C-130は熟練パイロットならどんな滑走路（たとえ砂ぼこりがあっても）でも着陸できることは私の経験から言える。これらの疑問については、いずれ回顧録等で明らかにされるだろうが、それまではかなりの時間を要するであろう。

5 作戦準備

Holloway レポートは次のように言っている。

「イラン人質救出作戦の準備に関しては、総合的なリハーサルをやらなかったことを除くと完璧だったといえる。作戦準備間、フルスケールのリハーサルを当然実施すべきであった」

私はこのレポートを見て大変驚いた。夜間、しかも遠く離れた敵地内の砂漠で、8機のヘリコプターと5機のC-130が会合することは容易なことではない。作戦参加者全員が、いつ、どこで、何が行われているかを完全に掌握しておくことは、作戦遂行に必要不可欠である。このためには総合的なリハーサルを必ず実施しておかねばならない。もし作戦に問題があるとすれば、イランではなく、ネバタ砂漠で検証し、洗い出しておくべきであった。

私は作戦参加者の一人から信じられない事実を聞いた。「我々の中で、かつて砂漠での着陸を経験した者はいなかった」という事実である。

砂漠での着陸は、多く問題を生起する。実際には、荒地での着陸を最後に実施してはいるが、それはあまりにも回数が少なく、また遅きに失していた。こういう任務がいつ生起するかわからないから、この種の訓練や経験を積んだ特殊任務のための要員を常時育成しておく必要がある。

もう一つの驚くべき事実は、ヘリコプターが、地上で **C-130** から燃料補給をする訓練を実施していなかったことである。このような普段とは違った、しかも難度の高い複雑な任務が実戦ではじめて実施されたのである。報告書にはまた、次のような記述がある。

「私は燃料補給については、てっきり事前に訓練されていると思っていたので、燃料補給にそんなに手こずっている状態が信じられなかった」

もし私がイラン人質救出作戦の報告書作成を命ぜられていたら次のように書くだらう。「作戦準備は次の理由で十分ではなかった…」と。

Son Tay 作戦ではどうだっただろう。陸軍と空軍は慎重に作戦参加要員を選択した。**Manon** と **Simons** は（本作戦における空軍及び陸軍の指揮官）訓練場所としてエグリン空軍基地の3番補助滑走路を使用し、リハーサルを実施している。

歴史は繰り返す。この近くで **28** 年前、ドーリットルが日本空襲のリハーサルを実施した。今日、ここで **Son Tay** の建物のモックアップが作られた。北ベトナムにあるのとそっくりの建物で、リハーサルが実施されたのである。

本作戦のように、時間的制約がクリティカルでない場合、作戦実施のための準備及び訓練が最重要課題となる。保全上の考慮から、モックアップは昼間に解体され、訓練は主に夜間実施された。このことは逆に実相に近い訓練となった。

Son Tay の建物については、**SR-71** や無人偵察機による写真情報に

よって、アップデートがなされていたが、問題は **SAC** の偵察パイロットには誰にもこの作戦については明らかにしていなかったことである。**SAC** の偵察センターの将校が次のように語っているが、私も全く同意見である。

「情報要求に関するもっと詳しい知識があれば、必要な場所をもっとうまく偵察できただろう」

再度繰り返すと、時間的制約がさほどクリティカルでない場合、このような大規模な事前準備、訓練を実施することに問題はない。しかしながら、もし時間的制約が厳しく作戦参加要員の訓練余裕が数日しかない場合、夜間飛行、給油訓練、あるいは編隊飛行等の基礎的訓練は実施できない。従って、これらの基礎的技量については作戦参加を命ぜられた時点で、既に血となり肉となっていなければならない。

Mogadishu 襲撃作戦は、一切の準備なく作戦が実施された代表例である。この種の作戦は絶えず特殊な訓練を実施している特殊部隊によって初めて成功の可能性がある。ここで留意しておかねばならないことは、この作戦は極めて良好な成果を挙げたが、ここで述べる他の事例に比して、かなり単純だったということである。

Mayaguez の事例では、海軍、海兵隊、空軍、それぞれの関係者は、作戦を準備する十分な時間的余裕がなく、現有の情報、武器で即座に対処しなければならなかった。フィリピンから **P-3** を偵察に飛ばせ、同時に沖縄の第3海兵師団の **1,100** 人はタイの **Utapao** 空軍基地に飛び待機についた。また、この時海軍は駆逐艦と空母を現場へ急行させた。米国のような強大国でさえ、すべての国際テロ行為に対し、全地球的に即応する能力はない。だが米国のような大国であれば、国際テロ用の特殊部隊を保有しておくのと、あくまでテロが発生した場所に最も近い駐留米軍部隊による対処に期待するのと、どちらが得策であろう。この事例では、米国本土から部隊を現地に急派する時間的余裕

はあったことは確かである。このような特殊部隊を数多く保有することによって即応態勢が完整できると私は考える。特殊部隊は言ってみれば、ボヤを消し止める消防車の役目を果たし、他の軍隊は、国防全般の任務に専念できることになる。

コンゴにおける **Dragon Rouge** 作戦では、米軍とベルギー軍は、一度も統合のリハーサルをしなかった。作戦に参加した両軍部隊は、かつて一度も統合作戦を経験したことはなかったばかりか、ベルギーのパarachute部隊は、**C-130** からは降下したこともなかった。

この作戦は、単にリハーサルが実施されなかっただけでなく、相互の基本的訓練や認識が欠落する等、様々な問題があった。まして言語が同じではなく、意志の疎通がうまくいくはずがなかった。このような非常に不利な条件下で、作戦の実施を許可することは、かなりの覚悟（又は無責任さ）が必要である。

エンテベの際、犯人が最後通牒という脅しをかけてきたころ、イスラエルでは、エンテベ襲撃作戦に対する準備が集中的に進められた。イスラエル空軍参謀長は後日、次のように語っている。

「私はこの時、飛行隊長及びレーダーナビゲーターとともにリハーサル飛行を実施し、種々の問題点を提起し、彼らがそれをいかに解決するかを注意深く見守った。2時間にわたる飛行の後、これらの問題点については十分解決し得ると私は判断したのである」

作戦実施前夜、総合リハーサルが実施された。エソテベターミナルを実物大模型で模擬し、すべての航空機、車両を含む空軍、陸軍の参加者全員が参加し、2～3時間一体となって実施された。すべてが何の支障もなく行われ、これ以上の訓練は不必要であった。参加者全員が基本的事項を把握し、自らの任務を熟知しており、残されたことはただ実行あるのみであった。

6 作戦実施と C³

Mogadishu 作戦における C³ は、基本的には応急的なものであった。当初、西独側は、情報入手するため、コントロールセンターとパイロットを通じ、ハイジャックされたルフトハンザ機と連絡をとろうとした。2機のボーイング機（一部の GSG-9 によってエスコートされた国務長官搭乗機と GSG-9 の第2部隊が搭乗する 707 機）はフランクフルトと連絡をとり続けた。彼らは首相から直接命令を受けて行動していたが、急激に推移する事態に即応してフランクフルトから命令を出し続けるのは困難なため、シュミット首相は緊急メッセージを出した。それは国務大臣が自分の裁量で様々な国々と交渉をすることができるというものであった。事実、この決定は、連絡のために貴重な時間を無駄にすることもなく、作戦成功に大切な役割を果たした。

作戦中、作戦保全上 (OPSEC) の問題と技術的なトラブルが重なり、707 機の GSG-9 部隊は Djibouti 空港に着陸するようとの誤命令を受けたが、彼らはこの命令に疑問を持ったため実際には着陸しなかった。その後、日没後に Mogadishu へ着陸し作戦を遂行するよう命令があったのである。この不利な状況下で、C³ は最高に機能したといえよう。ミュンヘンでの惨事、つまり 1972 年オリンピックの際におけるイスラエル人の人質救出作戦以降、西独は、Ulrich Wegener 率いる GSG-9 を創設し、この部隊が Mogadishu 作戦を完璧に遂行したのである。

イランで行われた救出作戦を再検討してみると、上級司令部間における C² (Command & Control) は良好に機能したが、中間司令部においては良好とはいえなかった。JTF (Joint Task Force) 以下の指揮関係は、ある面では極めて不明瞭であり、心理的なプレッシャーがある状況下においては、疑問や過誤を招く結果となる。大統領は、高度な通言手段を利用して、ワシントンから作戦命令を下すことができたが、それは真に必要であったのだろうか？このような長距離かつ複雑

な命令系統は、作戦遂行に役立ただろうか？大統領は、軍の最高指揮官として、当然作戦実行のための決定を下さねばならないが、作戦上の決心事項は権限を与えられた現場指揮官のみが、その権限内において決心すべきであると私は確信している。

現場指揮官の立場で言うと、これらの高度な通信手段は、可能な限り政治的決断の伝達確保のためにのみに使用されるべきであろう。また純軍事的な問題による作戦中止の決断は、明らかにプロである軍の指揮官が実施すべきものである。

“Desert One” という一つの作戦に、陸軍、空軍、海兵隊、それぞれの人員を参加させたことは“心理的プレッシャーによる過誤”に拍車をかけた。実際の作戦行動については、C-130については非の打ちどころがなかったが、海兵隊のRH-53Dについては、この種の作戦としてはあまり良好とはいえなかった。このような状況下での訓練不足及び不運が悲惨な結果を招来したといえる。事故はいつでも起こり得るものである。中止となった部分の作戦行動については、詳しい資料がないので、私には意見を述べる資格がない。ただ言えることは、この作戦は、かつて例を見ない困難な作戦であり、極めて勇気を必要とするものであったということであり、もし成功していたならば、歴史に残る作戦となったであろう。

エンテベへのThunderball作戦においては、指揮、統制は当初、軍司令部から直接編隊長に対して実施された。エンテベ空港着陸後の30分間は、イスラエル空車の707機に搭乗し、近くを飛行している陸軍副司令官及び空軍司令官から命令が下された。その後のエンテベにおける指揮は、Shomron准将に引き継がれた。この作戦では、作戦行動中、必要な時にいつでも作戦上の決断は迅速になされたのである。イラン人質救出作戦の参加者は次のように述べている。

「エンテベの場合、シナリオは我々のものと比較にならないほど単

純である。目標はほとんど防御されておらず、しかも町から遠く離れていた。我々の場合、目標はテヘラン市街の真ただ中であって嚴重に防御されていた。また、イスラエル軍は、作戦中彼らの判断で人質を万一、失うことがあってもやむを得ないとしていたが、我々の場合は全く異なっていた」

二つの作戦を比較するのは、意味のないことであるが、上記のような見方は、軍事行動に対する認識が著しく欠如していることを表している。テヘランの場合、エンテベよりも複雑であったことは認めるが、**Desert One** に関する限り、そうは思わない。また、テヘランでの作戦計画時、人質の安全確保、死傷者の局限を強調したのと同様に、エンテベの場合もこれが強調された。そして、エンテベの場合の単純さについて言及すると、簡明さを確保するために大変な努力がなされたのである。簡明な計画ほど過誤も少なく、したがって成功するチャンスをより多く有する。哲学における **Occam's Razor** の説にも、二つの類似した仮説のうち、いずれかを選ぶ場合、簡単な方がより良いとされている。**Yitzhak Rabin** は、エンテベ作戦後、次のように語っている。

「この完璧な作戦は、創造力、主動力、それに勇敢さと長年の訓練の成果である。それは、ごく普通の招集された兵と軍人によって完遂されたのである」

Mayaguez 事件においても、イスラエルの場合と同様に、偵察と監視の飛行が行われた時には、既に乗員救出のための軍事行動はとられていた。「F-4 ファントムは **Mayaguez** 号の前後を爆撃してきた」と乗員が語っているように、米空軍は航空機による攻撃行動をとった。この後、ホワイトハウスからの直接命令で、F-4、A-7、F-111 をもって、カンボジアの軍艦を沈め、捕虜を本土に連行するのを阻止しようとした。「いかなる手段を講じても、船を阻止せよ」と大統領は戦闘

機に指令した。これが特に効果的な命令であったというのは、現場で発生する事象を適時適切に統制できない場合、現場指揮官に達成すべき目標を示し、細部の方法は委任するのが最良の方法であるからだ。

この時実施された作戦行動は、極めて効果的であり、カンボジアの人々に事態の重大さを理解させ、アメリカのき然たる態度を認識させることができた。しかしながら、その後の行動は、過剰反応に見える。本土への攻撃は、救出作戦のための必須行動というよりは、カンボジア人への懲罰行動と見られた。(実際、アメリカ人自身がそう認識していた。)

ある軍事行動に対する見方は様々であり、興味をそそるものがある。**B-52** は、これより以前、東南アジアで用いられ、かなりの効果を挙げているが、この場合 **B-52** を使用することの必要性ははっきりしない。また、**C-130** から **15,000lb.**の爆弾を落として、ヘリコプターの着陸場を作るのは興味深い運用であるが、米国側の絶対的優勢下で、海兵隊にこのような多くの犠牲が出たことはいかなる理由をもってしても正当化することはできない。米国は東南アジアにおける政治的失権後、**Mayaguez** のような作戦が必要となった。TIME 誌 (1975. 5. 26) がこう書いている。

「…アメリカ魂を傷つけることなく、同盟国に安堵を与えた作戦の成功であった。本事件における最も重要なことは、状況の不確かな段階で、米大統領が確固たる意志を明確に示したことである」

私は米国政府の耳ざわりなほどの自信と、救出作戦で見せた海兵隊の勇敢さには敬意を払う。しかしながら、純軍事的に言えば、もっと効果的に任務が遂行できたと考える。**Mayaguez** 号の船長は後にこう語っている。

「我々を救うために、多くの犠牲者が出たことを思うとき、慟哭を禁じ得ない…」

Son Tay 救出作戦においても、北ベトナムから不運な捕虜を放出するため、多くの人々が自分の生命を危険にさらした。この時は、**Leroy J. Manor** 准将がダナン近くの指揮所から作戦を指揮した。おそらくこの指揮所は、現場から少し距離がありすぎたと思われる。しかしながら、この状況下では、使用できる場所としては最良であり、ワシントンから作戦指揮をとるよりはましであった。このような遠隔地から指揮をとり、作戦を成功に導くには、極めて高度な技術が必要である。不幸にも状況の変化に応じて、これがうまく機能しなかった。その結果、**Manor** 准将は、**Son Tay** で起きている不正確な情報しか得ることができなかつたのである。

本作戦における作戦指揮官は、事実上、作戦参加者の一人である **Simons** 大佐であったといえる。ペンタゴンの指揮所は、2～3分の遅れで状況を把握していた。しかしながら、本作戦では、肝心の作戦指揮官が聳巣敷に置かれたため、最も緊要な時期に失敗を犯してしまったのである。

作戦それ自体としては、スムーズに実施されたといえる。夜間しかも低高度での空中給油は難しい作戦であり、特にタービュランスがある場合なおさらであるが、本作戦では難なく実施できた。収容所内への強行着陸は、おそらく、かなりの困難が伴ったであろうが、これも大した問題なく実施している。また **Simons** の部下が目標 400m それで着陸してしまったミスも直ちに取り戻している。勇敢な **Simons** は後日、次のように語っている。

「…何だって？我々が失敗したとでも言うのかい。おれは心底からうまく行っただと信じているさ。ただ、我々には何の情報も与えられなただけで、何の情報もなく実行すると、うまくやれる訳ないさ…」

捕虜が依然そこに居るかどうかの疑問は、終始ついて回った。時間をかければ、この疑問を解決することはできたと思われるが、あまり

に多くの人々が、とにかく行ってみることを要求したのである。 **Don Blackburn** は後に、この事実を認めている。「私は知りたくなかった。ただ、行きたかったのだ」と。その結果、存在もしない捕虜収容所に対して捕虜救出作戦を実施したのであった。

コンゴにおける作戦の指揮関係は、同様に複雑な問題であった。誰が指揮をとるのか？アメリカ人？それともベルギー人？統合作戦計画立案時には次のような合意がなされていた。落下傘降下地域までの統合作戦指揮については、米国が責任を有し、降下地域でベルギーの指揮官へ指揮権が委譲される。この合意はすばらしいものであった。指揮権が他に移るというアメリカ式指揮構造に存する問題点については、コンゴの地に着いた時点をもって指揮権移行点とするという方法で解決していた。

確かに、指揮通信用に特別改修した **C-130** (“**Talking Bird**”) の使用は、この地域での作戦に欠かせないものであった。この時、米軍の連絡将校である **Rattan** 中佐が、軍事作戦行動の調整を図り **Leopoldvill** (司令部) に報告するのに、**Collins** ラジオを使用することをワシントンが認めなかったため、なおさらこれは必要であった。このワシントンの処置は、健全な軍事的常識に対する非常識なオーバーライドの典型的な例であり、全く奇妙な話である。それにもかかわらず、作戦実行の段階では、事は非常にうまく運んだ。

落下傘部隊が **C-130** から降下して飛行場を確保し、他部隊の車両投下を可能ならしめた。4台の武装車両を搭載した **C-130** 1機は約1時間遅れて到着した。結果論ではあるが、ベルギーの指揮官が、この車両の到着を待ったのは、悲しいかな失敗であった。人質が関与している作戦においては、迅速性と奇襲性は極めて重要な要件である。このケースでも、遅延が人質の生命を奪った。振り返ってみると、ベルギーの指揮官は、4台の車両が無くても、直ちに行動を起こすべきで

あった。こういう失敗はあったが、それでもこの **Dragon Rouge** 作戦は、十分な準備が出来ず、しかも単純なC³しか無かった点を考慮すると、うまく実行できた作戦であったといえよう。

7 結論及び提言

テロリズムは、国際社会がこれと戦おうとしない限り、絶滅させることはできない。また、戦う場合には、ある程度国際的な反動が予測されるため、国家首脳の堅固な意志が必要となる。

たとえば、コンゴ事件の場合、ソ連は「コンゴに対する、いかなる動きも内政に関する重大な干渉である」と捉えていた。こういった態度は、虐殺、暴行、強姦の犠牲となる婦女子の人質を救出すべきであるという国際世論の醸成を困難にした。彼らを救う道は他にあっただろうか。私には答えられない。しかしながら、重要なことは、彼らのほとんどが事実救出されたことである。

この例が示すように、政府は国際テロと戦う場合、武力行使の意志を持つ必要があることを理解する必要がある。同時に、政府はこのような複雑な状況下では、でき得る限り迅速に処置をとらなければならないことを銘肝しておかねばならない。なぜなら、時間が経過することにより、多くの無実の人々が犠牲になる可能性があるからである。従って、直ちに国際テロに対処できるよう、特殊訓練を受けた対テロリスト部隊を、一年中、また四六時中、即応の態勢に置いておく必要がある。

事件発生後に基本的訓練を実施する時間的余裕はない。また、たとえ余裕があったとしても、起こり得るあらゆる事象に対し準備することは不可能である。そうはいえ、人質救出のような事態に対する、ある種の基本的な対処法や手順は存在するし、錬磨すべき数々の軍事的技能もあり、部隊を高い即応態勢におくことによって、多くの時間が

節約でき、結果的に多くの人質や救出隊員の生命が救われることになる。

計画立案に関していえば、将来起こり得るすべてのシナリオを考慮しておく訳にはいかない。訓練計画担当者は、常に最新の情報を入手し、時期を問わず作戦が遂行できるよう訓練計画を立てておく必要がある。これに加えて、被訓練者が、作戦計画立案に参画できなければならない。

航空襲撃作戦に必要な装備品に関する基本的知識は直ちに必要になる。考慮が必要なものと計画の中に入れてなくても良いものがある。たとえばC-130用 Flyaway Kit、これは砂漠に着陸する際必要となる。これをいつでも直ちに使えるようにするためには、あらかじめ事前備蓄しておくことが必要である。このような知識は、特殊作戦のチェックリストに入れておくべきである。

また計画は完全ではあり得ない。常に作戦失敗時の計画や代替計画を持っておかなければならない。とはいうものの、四つも五つも用意する必要はない。あまり多くの代替計画を持ちすぎると、逆に国家意志決定者が選択するのに混乱を招くことになる。また隊員が、実際に使用する装備を使って訓練することは極めて大切なことである。

偽騙や陽動作戦は重要であり、時にはこれが必須となるが、これらは慎重かつ綿密に検討しなければならない。あまりに複雑な策略は、遂に敵に警戒心をいだかせる結果となり、まさに両刃の剣といえる。

また全隊員は、できうる限り、互いの能力、人柄を知っていた方がベターである。局限状態下での作戦においては、他の隊員が何ができるかを知っていることが、成功の鍵となることがある。

任務完遂に重要なもう一つの要素がある。それは、人質救出のためには、一般社会でいう道義に縛られる必要はないということである。すなわち、人質救出という目的のためには、誰が何をしようと、どう

いうやり方でやろうと、かまわないと私は考える。また、このような作戦は、予算で制約を受けるようなことがあってはならない。どんなにコストがかかろうと、最優先で支出されなければならないし、何ものにも代え難いと考えなくてはならないのである。

一般的には、テロリストたちは、これに立ち向かう特殊部隊より、経験も積んでおらず、気が動転していることが多い。このテロリストたちの恐怖心や経験の無さについては考慮に入れておく必要がある。ある面では、これは救出する側に有利であるが、逆にテロリストたちを狂暴にし、不必要な犠牲を生ずる結果にもなりかねない。

OPSEC（作戦保全）は、いかなる作戦においても欠かせないものである。しかしながら、任務遂行が第一であり、OPSEC 自体は任務そのものでないことも事実である。各種の作戦例を縷々述べてきた中にあるように、C³は作戦における必須の要件である。理想的には、可能な限りシンプルにしておく必要がある。また、誰もが作戦推移のすべてを逐一知っておく必要はない。

現場指揮官の自らの判断で行動できる権限を与えるべきではあるが、しばしば政治的判断から、この軍事的必要性が無視される。現場指揮官は、指揮官として選抜され、また作戦目的を熟知しているが故に、状況に応じて何をすべきかを最も良く把握している。この見地に立つと、現場指揮官が状況に応じて決断を下し、決心を変更したりする裁量の余地がかなりあるはずである。

作戦計画立案段階に、あらゆる可能性を網羅しておくことは、たとえ時間的余裕があっても困難である。また、選択肢が多すぎると、心理的圧力が、かかっている状況下においては、混乱を招くおそれが多分にある。

作戦後のディブリーフィングは、冷徹かつ厳しい批判の眼を持って実施されなければならない。失敗は特に強調し、しかも注意深く分析

する必要があり、違反は非難され、罰せられなければならない。特殊作戦については、全く妥協の余地はない。作戦を適切に評価できなければ、将来に大きな禍根を残すことになる。

表彰や勲章は必要であるが、真に抜群の働きをした者だけに限定すべきであり、作戦参加者すべてに、押しなべて与えるようなことをしてはならない。でなければ、表彰や勲章そのものが価値や意味を失ってしまうことになる。

エンテベの後、イスラエルの首相は次のように言っている。

「エンテベでのハイジャックは、テロ活動の最初でもなければ、悲しいかなこれで終わりでもないだろう。エンデベで証明したように、我々を傷つけようとするテロに対しては、我々は断固として、これと戦う。我々はそれがどこで発生しよう、どんな時であろうと、必ず打ちのめしてみせる」

自由世界の国々は、国際テロの被害を受ける可能性がある。これに対しては、反撃する権利を有するはずである。問題は反撃する意志を持つか否かであり、時間的要因が事態の命運を大きく左右する。国際テロに対する航空作戦、つまり航空襲撃作戦は、この時間的要因を考慮するに、極めて有効かつ効果的な手段の一つといえよう。 （完）

筆者略歴：Joshua Shani 大佐 1945年にロシアで生まれ、1947年、両親とともにイスラエルに移民。高校卒業後、空軍士官学校（1963～65年）に学び、卒業後は、主に飛行隊で勤務。この間2年間は操縦教官として勤務。1967年の6日戦争、1973年の“ヨムキプル”に参加。2回の飛行隊長経験を有し、エンテベ作戦では、編隊長として参加し、作戦成功に多大な貢献をした。1978年航空団司令の職に就き、1983年には米空軍戦略大学（Air War College）を卒業。